

奴隷共用菜園・野菜畑の歴史的展開及びその役割

—集団/共同奴隷耕作地の全体像解明に向けて—

The Common Vegetable Garden/Field for Slaves:
Its Historical Development and Role

沼 岡 努
Tsutomu NUMAOKA

要約

合衆国南部奴隷制下において奴隷主が奴隷に与えていた食料の一つに野菜類がある。この野菜供給問題に対して奴隷主が採った政策の歴史的展開を明確化すると同時に、特にアンティベラム期に普及した奴隷用野菜栽培地の形態、運営、その歴史的役割を析出した。

奴隷主による配給食料政策は、1830年頃を境にそれ以前と以後とで大きな差異を見せた。1830年以前においては、経費節減を基本とする食料政策により対奴隷野菜供給は低水準で、その補完として奴隷自身の家庭菜園活動を強く促す傾向にあった。それがアンティベラム期に入ると、奴隷主、特に利潤指向型プランター階級の労働意欲刺激策の下で野菜供給政策が積極的に展開した。従来の野菜供給源であった「奴隷主菜園」の拡充のほか、より広い菜園が新たに設置されたり、大規模プランテーションにあっては主要商品作物用耕地中に菜園や種類別野菜畑が設けられた。これら菜園・野菜畑での奴隷労働は半自律的協働ともいえる緩やかなものだった。菜園、特に野菜畑は、奴隷自身の耕作地へと変容・転化する可能性を秘めた、いわば擬似的集団/共同奴隷耕作地と位置付けられよう。

はじめに

アメリカ史において、南北戦争（1861-1865）直前のおよそ30年間はいわゆるアンティベラム期と称され、南部では黒人奴隷制が以前にもまして経済的基盤を確固たるものにした時代であった。このアンティベラム期に奴隷主、とりわけプランター階級は利潤極大化指向の下、経営の合理化、効率化を積極的に推し進めていった¹⁾。彼らは徹底した労務管理を行う一方、奴隷の労働意欲を刺激すべく彼らの衣食住改善運動を積極的に展開した。特に企業家的・資本主義的精神を内面化したプランターたちは、奴隷の常食に細心の注意を払い、配給食料拡充策に乗り出した。

この政策の中であって、トウモロコシや豚肉のような中核的要素にはなり得なかったが、種々の野菜を「常に」、「豊富に」、「ニグロが望むだけ」与えることが彼らの労働意欲・生産性の向上には不可欠であるとの認識がプランター間に浸透していった²⁾。こうして、対奴隷野菜支給政策は労働

政策と有機的に結び付き、アンティバラム奴隷制プランテーションにおいては、綿花、タバコ、米といった主要商品作物用の広大な耕作地と並んで、奴隷たちのための「菜園」(vegetable garden)ないしは「野菜畑」(vegetable field)が現出した。

この小論の目的は、アンティバラム期に普及した奴隷共用の野菜栽培地の系譜を奴隷主の労働政策的観点から明確化すると共に、その歴史的役割を析出する点にある。従来、共用野菜栽培地が果たした役割は研究者たちによりあまりにも等閑視され過ぎてきた観が深い³⁾。それは次のような先行研究や研究者の関心のありようと密接に関係している。すなわち、いわゆる「奴隷耕作地」(以下、「耕作地」)―奴隷主が奴隷に対して用益権を付与した土地のことで、奴隷小屋隣接の家庭菜園もその一種であった―研究はこれまで奴隷の経済的自律性を支持する形で進められ、奴隷自身による独立経済活動が強調される傾向にあった。このため、奴隷主側の意図、関与に注意が払われることはほとんどなかった⁴⁾。また、奴隷に対する野菜供給は、従来配給食料問題として位置付けられ、栄養学的論点からの議論が圧倒的に多かった。それゆえ、奴隷の常食、特に野菜を労働使役政策との関連において捉える分析視角が欠落していた⁵⁾。更にもう一つ、商品作物生産に比して消費野菜生産そのものに対する研究者の関心が低かったことが挙げられよう。市場価値の低さは自ずと研究者たちの目を野菜―トウモロコシやサツマイモなど、一部の作物に関しては多少事情が異なるが―から綿花、タバコ等商品作物へと向けてきたのである⁶⁾。

以上の研究史的問題点を統一的に把握しつつ、集団/共同奴隷耕作地の全体像構築に向けて⁷⁾、プランターの残した奴隷労働日誌及び元奴隷に対するインタビュー記録に可能な限り精緻な検討を加えることにより、奴隷共用野菜栽培地の系譜及び歴史的役割を探ってみたい。

1. 奴隷主による野菜供給政策―「奴隷主菜園」と「奴隷耕作地」の連係

1730年代前半、創設間もないジョージアに赴き、植民地指導者として貢献したジョハン・ボルツィアス (Johann M. Bolzius) は、1750年頃のジョージア、カロライナ両地域の奴隷の置かれた貧しい食事情について日誌に次のように書き留めている。彼らに与えられるのは「トウモロコシだけ」で、それを「粉挽き器を用いて自分で挽かなければならない。味付け用の塩はほんのわずかしが支給されなため、水だけで調理している。」「トウモロコシの代わりにその間に作付けされる豆類を、時にはサツマイモなども支給されることがある。」しかし同時に、ボルツィアスは「自分の食物を自分で栽培しなければならぬ」隷従奴隷の境遇を決して見逃さなかった。彼らには「自身で耕作できる可能な限り広い土地が与えられるのだ。そこに彼らはトウモロコシ、サツマイモ、タバコ、ピーナッツ、スイカ、カボチャを植えている。」このおよそ四半世紀後、独立革命期のノース・カロライナを訪れたジャネット・ショウ (Janet Schaw) は、日記の中で黒人奴隷の食生活に触れ、「ニグロに与えられているのは、1日1クォート [1.1ℓ] のトウモロコシと一区画の耕地だが、彼らはその土地を主人などより遥かに上手に耕している」と記している⁸⁾。

植民地時代の対奴隷野菜供給は、一般に搾取的労働使役と一体化した形で配給食料政策が展開したため、その量、質共に低水準であった。こうした状況は植民地時代末期から独立期にかけても同様であった。上の二人の観察記録から、われわれは当時の配給食料事情及びその補完としての奴隷自身による「耕作地」活動状況を概ね把握することができる。当時奴隷主は、主穀トウモロコシを

第1図 ジェファソンの孫アン・ケアリ・ランドルフ
(1791-1826) 記帳の奴隷生産物購入帳簿

出典： Presidential Papers Microfilm, Thomas Jefferson Papers, series 7, vol. 1, Record of Cases Tried in Virginia Courts, 1768-69, Library of Congress.

奴隷に配給し、時にその代用、補完として豆類、根菜類などを与えた。これらは通常、奴隷主宅の裏手にあった菜園・庭畑（以下、「奴隷主菜園」）で栽培されたが、奴隷主はこの配給野菜の不足分を「耕作地」活動で補うよう奴隷に指図することを忘れなかった。だが、こうした奴隷主の強制あるいは半強制は、奴隷側の「耕作地」労働忌避ないしは抵抗運動を惹起するどころか、自分自身のための生産活動、更には奴隷主への売却や近隣市場での取引活動に直結する経済的営みとして奴隷の労働意欲を大いに刺激した。1772年発行の『サウス・カロライナ・ガゼット』（*South Carolina Gazette*）紙は、女奴隷たちが自分で生産した様々な産物を「田舎から持ち寄って…朝から晩まで場所を陣取り、好きなように自分たちの品物を売買している」活気溢れる小取引の光景をいみじくも描いている。先に引用したショウの言葉といい、「耕作地」の労働誘因の効果が大きかったことを物語っている⁹⁾。

奴隷主にとって、「耕作地」活動は食料経費の節減につながるので好都合だった。しかし、活動時間の増大をもくろむ奴隷側の種々の圧力により、両者間では緊張を孕んだ絶えざる闘争が水面下で進行した¹⁰⁾。こうした問題を抱えながらも、「耕作地」は1780年代までに奴隷制下に広く浸透した。やや時代は下るが、ヴァージニアのタバコプランター、第3代大統領トマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）の邸宅モンティチェロの調理場で繰り広げられた「耕作地」生産物の頻繁な売却行為は、建国期前後の時代に奴隷主の許可の下に「耕作地」活動が奴隷間にしっかりと根を下ろしていたことを物語る象徴的出来事といえるであろう（第1図）¹¹⁾。同時にそれは、奴隷主が「奴隷主菜園」の補完として意図した「耕作地」がその役割をかなりの程度果たしていたことを意味する。

これ以降、高南部からアラバマ、ミシシッピ低地帯へと奴隷所有者の移住の波が押し寄せ、低南部一帯に綿花プランテーション経済の拡大を見た。プランターの綿花栽培への傾倒は、奴隷たちにかつて経験したことがない程多くの時間とエネルギーを綿花労働に注ぎ込ませることとなり、「耕作地」活動を圧迫した。このため、「耕作地」活動をめぐる水面下闘争はいっそう激化していった。結局、プランターの綿花至上主義により「耕作地」活動に制限が加えられ、その分「奴隷主菜園」の役割が重視されていった。それはアンティベラム期を通じて展開していくプランター階級による

経営の合理化、効率化政策の中で具体的な形となって現われていく¹²⁾。総じて、植民地時代から1830年頃までの奴隷主による野菜供給政策は、「奴隷主菜園」を基軸としながらも、可能な限り「耕作地」活動を利用した奴隷による野菜充足を指向するものであったといえるであろう。

2. 「奴隷主菜園」の変容—共用化への道

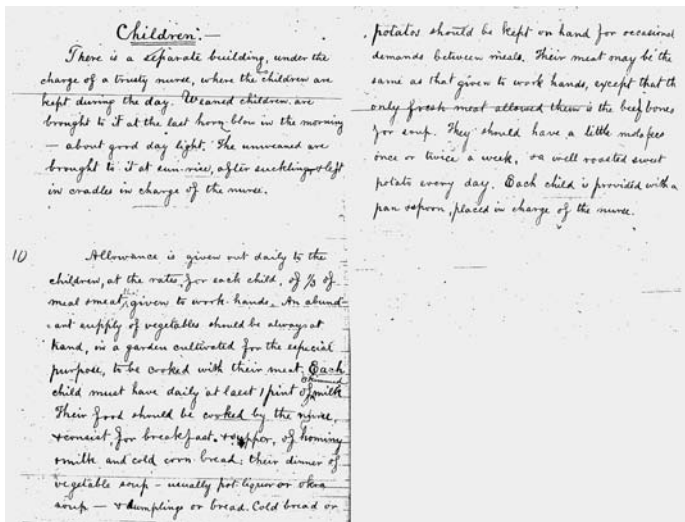
独立後半世紀を経てアンティベラム期を迎える頃、奴隷制は南西部へと拡大・発展し、いわゆる「綿花王国」(Cotton Kingdom)を創出した。前述のように、この時代の奴隷主、とりわけ企業家的・資本主義的プランターは、鞭打ち、焼印等の肉体的強制—辺倒の労働使役に傾斜せず、奴隷の自主的労働意欲を最大限引き出すことに心を砕いた¹³⁾。感情的懲罰を極力排し、「理性的」、「人間的」な扱いの肝要性を説いた¹⁴⁾。アラバマ州のあるプランターは1852年、南部主要経済誌『デュ・ボウズ・リヴュー』(*De Bow's Review*)において、「われわれは皆、奴隷も自分たちと同じ人間であるということを忘れてはならない」と奴隷主階級に呼びかけた¹⁵⁾。こうした理念に裏打ちされ、植民地時代とは多分に性格を異にする近代的労務管理の下で配給食料政策が展開していった。そして、この中で野菜供給政策も大きな転換を遂げることになる。

普通奴隷主は、週1回奴隷たちに食料を配給した。中核を成したのはトウモロコシと豚肉である¹⁶⁾。プランテーション記録を始めとする奴隷主側史料をもとに成人奴隷一人当たり週平均配給量を算出すると、ひき割りトウモロコシ1~1.5ペック [9~13ℓ]、ベーコン3~4ポンド [1.4~1.8kg]となる¹⁷⁾。この量は奴隷側史料からも確認される。例えば、ヴァージニア生まれの奴隷キャリー・ウィリアムズ(Callie Williams)は、毎週「燻製肉3ポンドと、ひき割りトウモロコシ1ペック」を支給された。また、サウス・カロライナ州のザック・ハーンドン(Zack Herndon)は「1ペックのひき割りトウモロコシと3ポンドの肉」を毎土曜日、半ガロン[約3.8ℓ]の黒糖蜜と一緒に配給された¹⁸⁾。量的にはまず問題はなかったであろう。そして実際、そのように受け止めた奴隷は実に多かった¹⁹⁾。

トウモロコシとベーコンの二大食要素はプランターが栽培する各種野菜により補完された。それは通常、プランター屋敷の裏手、つまり陽当たりの良い南側に面する「奴隷主菜園」(master's garden/"big" garden)で栽培された。広さは1/4エーカーから1、2エーカー程度であったが、大プランテーションともなると、5、6エーカーあるいはそれ以上の菜園も散見された。日常的な手入れは、「菜園管理奴隷」(negro gardener)と呼ばれる野菜栽培に精通した専従奴隷が若干名の奴隷—大抵は子供奴隷であった—を指図しながら行っていた。一般に緑野菜、豆類、根菜類等が植えられたが、その種類は農園規模が大きい程多岐にわたった。

オクラホマ州の奴隷ジェファソン・コール(Jefferson Cole)は、1/4エーカー程の主人の菜園に「キャベツ、蕪、からし菜、ソラ豆、エンドウ豆、コラード」が栽培されていたことを想起したが、多くの場合この他に、トウモロコシ、サツマイモ、玉葱、カボチャなども栽培された。大プランテーションの中には外国から種子を輸入し、30種類以上の野菜を栽培している例もあった²⁰⁾。しばしば奴隷たちの目に「ありとあらゆる種類の野菜」が栽培されていると映ったのも不思議ではない²¹⁾。メリーランド、サウス・カロライナ、ジョージアの3州で隷従を余儀なくされたチャールズ・ボール(Charles Ball)は、奴隷260名を所有する主人の5エーカーの「奴隷主菜園」について、「実に多種多様な野菜が栽培されていて、その内何種類かはフィラデルフィア市場でも見たことがなかつ

第2図 ジェームズ・H・ハモンドが書き留めた 子供奴隷に対する配給食料の覚書



出典：Plantation Book, 1857-1858, James Henry Hammond Papers, South Caroliniana Library, University of South Carolina, Columbia.

南北戦争前に計3回、延べ1年間各地のプランテーションを巡った。訪問したルイジアナのプランテーションで、彼は「奴隷主家族にはもちろん、ニグロたちにも供給する野菜が栽培されている」プランターの菜園を目にしたのであった²³⁾。こうした「奴隷主菜園」の共同利用という拡大的機能は、利用者であった元奴隷たちの証言からより明快に知ることができる。

「主人は広い菜園を持っていました。私たちはここから好きだけ採って食べても構いませんでした。」「白人も黒人も同じ菜園のものを採って食べました。」「旬には、ニグロたちは主人の菜園を利用することができました。」「わたしたちはその [主人の] 菜園へ行き、サツマイモを掘り、またキャベツも手に入れました。」「皆 [奴隷たち] が食べる食物は全て主人の菜園でつくられました。誰でも、いつでも十分食べられるくらいの量を栽培していました。」²⁴⁾

こうした簡明直截な元奴隷証言は枚挙にいとまがない。今や奴隷は自身の家庭菜園とあまり変わらない利用が可能となった。テネシー州のある奴隷の祖母は、^{スレイヴ・クォーター}奴隷居住区で畑奴隷たちの食事係をしていたが、その準備中に「野菜が欲しくなると、ちょっと誰かを主人の菜園に採りに行かせた」という²⁵⁾。しかし、その管理・統制権が依然プランターの掌中にあった点は留意しておく必要がある。プランター階級の利潤極大化政策の一環である衣食住改善運動の高揚がその背景にあったからである。サウス・カロライナの大プランター、ジェームズ・ハモンド (James H. Hammond) は、成長期の子供奴隷たちにいつでも十分な野菜を直ぐに供給できるよう、「特別な目的で耕作される [子供用] 菜園」までも用意した (第2図)。そして、この政策を次男エドワード (Edward S. Hammond) も踏襲した。これは何も彼らのパターナリズムに因るものではなかった。労働勢力の

た」と、その驚き様を後に自伝に書き記すほどであった²²⁾。

さて、「奴隷主菜園」は、植民地時代からある程度は一般奴隷向け配給野菜も栽培していたが、白人家族用の野菜確保を一義的としていた。しかしながら、アンティベラム時代の南部旅行記や元奴隷証言から浮上する菜園像は、それ以前のものとは明らかに性格を異にするものであった。それは一言でいえば、主人、奴隷の共用化が一段と進んだということである。ニューヨーク州の一農民で精力的旅行家としても知られたフレデリック・オームステッド (Frederick L. Olmsted) は、南

統制をプランテーション「一大事業の成否の鍵」と認識し、徹底した懲罰・報奨体系を実践した奴隷主の戦略に他ならなかった²⁶⁾。以上のように、利潤追求を最大目標に掲げたプランター階級の対奴隷管理政策の基本的転換が「奴隷主菜園」を変容させたのであった。

3. 「共用菜園・野菜畑」の現出及びその形態

アンティベラム時代の初期、1830年にプランテーション経営に精通したある識者は、サウスカロライナ州チャールストンの農業誌『南部農業経営者』(*Southern Agriculturist*)に、以下のようなきわめて示唆に富んだ新しい菜園の形態及びその運用法を提言した。

「プランテーション経営者のために耕作される土地とは別に、どのプランテーションでもその土地で働く全てのニグロの食生活を満たす量の野菜を育て得る広い菜園が隣接して作られるべきである。そうすることでニグロの健康は促進され、体調は良くなり、食の種類が増えるという面からも食生活が更に豊かになるであろう。しかしながら、このような菜園が設置されているところはほとんどない。前例がないこと、野菜を育てることの難しさ、的確な指導がなされてこなかったことが原因の一部であると考えられる。・・・提案したい二つ目であるが、広大な菜園を作り、頭の良いニグロを一人選び、その菜園を耕すニグロたちを監督させる。そのニグロたちは、彼らの中の「長」(head gardener)の指揮下で週に数時間その菜園で働く。ニグロたちは毎日一人平均30分以上1時間以下の間菜園で働くことになるが、彼らだけでなく彼らの家族の食生活が豊かになることで間違いなく報われるだろう。」²⁷⁾

この提言は、以後アンティベラム期を通じて南部各地のプランテーションに広く普及していく新しい型の奴隷共用菜園の誕生とその有用性を的確に言い当てており、まさに慧眼というほかない。では、ここに示されている形態の全奴隷用菜園は実際どのようにして誕生したのであろうか。

新たな経営理念の下、新しい野菜供給政策を実行する上でプランターには選択すべき二つの方策があった。一つは、野菜を十分供給するにはそれ相応の広さの土地が必要であるとの認識に立ち、従来運用していた「奴隷主菜園」のいわば拡張型菜園をつくる一十分な空間を確保できる農園では「奴隷主菜園」自体の拡張で対応するケースも存在した—というものであった。もう一つは、土地に比較的余裕のあるプランターが導入したもので、単なる菜園の拡張ではなく、より合理的、合目的的政策として、日当り、水はけ、土質など、生育条件の観点から種類別に栽培適地を選定していく分散型野菜畑地の設定であった。こうしてアンティベラム期には、奴隷が共同利用できる広い野菜栽培地（以下、「共用菜園・野菜畑」）が、種々の野菜を同一区画地内に植えていく「菜園」(garden)型（以下、「共用菜園」）と各種野菜を個々別々に配置する「畑地」(field)型（以下、「共用野菜畑」）の二種の形態を以って展開することとなった。いずれにせよ、以前にはほとんど見られなかった広大な野菜栽培地がここに現出するのである²⁸⁾。以下、これらの形態について各々見ていきたい。

まず、最初に「共用菜園」である。基本的にそれはプランター屋敷近くか奴隷監督の住居から目の届く範囲内に設置された。そのことは、農園内の附属施設との位置関係からも確認される。例え

ば、ジョージアのあるプランテーションを視察した際、前述のオームステッドは、「農機具小屋、トウモロコシ保管庫、家畜小屋、貯蔵庫の前を通り、広い菜園—ここに〔白人〕家族はもちろん、ニグロたちにも供給される野菜が栽培されているのだが—を過ぎたあと、米作耕地まで歩いていった」のであった。こうした立地の主な理由は、利用者である白人、黒人の利便性はもとより、奴隷による窃取防止の点にあった。特にトウモロコシやサツマイモは換金性が高かったため、監視しやすいように農園中央部施設に隣接する形でレイアウトするプランターが多かった。「共用菜園」が時に「プランテーション菜園」(Plantation Garden)あるいは「中央菜園」(Central Garden)などと呼ばれたりしたのも、あながちこうした立地と無関係ではあるまい²⁹⁾。

しかしながら、プランターの中には農園中央部にはなかなか広い空間を確保できないという理由から、プランテーション耕地内の入り口近くに広い菜園を設置するプランターもいた。プランテーション耕地中の「共用菜園」である。その存在は、例えばミシシッピ州の奴隷ヴァージニア・ハリス (Virginia Harris) の証言によって確かめられる。彼女は「夏季になると、広い耕地菜園 (field garden) からソラ豆、エンドウ豆、また種々の野菜を手に入れたが、それは〔プランテーションの〕全ての者のために栽培されたもの」だった³⁰⁾。

次は菜園の面積であるが、これを一般化することは難しい。野菜は大半が自家消費で、日常の食生活にごく自然に入り込んでいたために、奴隷主は帳簿、覚書等に栽培面積や生産量をあえて記録する必要性はほとんどなかった。とはいえ、栽培面積と所有奴隷数との間に高い相関関係が見られたことは言を俟たない。南部農業史家サム・ヒリアード (Sam B. Hilliard) は、50~100名の奴隷に野菜を十分供給するには「何エーカーもの土地」が必要であったと述べ³¹⁾、菜園規模について大まかな輪郭を与えている。しかし、より具体的な数値は、図らずも奴隷側証言から得ることが出来る。奴隷約70名のプランテーションで働いていたテキサス州のカルヴィン・モイ (Calvin Moye) は、主人が約10エーカーの「共用菜園」を管理していたことを憶えていた。また、少々規模は大きい、ジョージア州の奴隷クラーク・ハード (Clark Heard) の「プランテーション菜園」は、耕作奴隷140~150名に対して「15エーカーから25エーカー」の広さであった。クラークの場合、主人が「耕作地」を奴隷たちに許可しなかった分、規模が大きくなったと考えられる³²⁾。

栽培作物についても見ておこう。農園中央部に近い「共用菜園」での野菜栽培の様子は、種類豊富な野菜が植えられていた「奴隷主菜園」のそれと比べてもほとんど遜色はない。ジョージア州のプランター組織機関紙『南部の耕作者』(Southern Cultivator) 1860年6月号にはプランテーションのごく一般的な日常生活を伝える記事が掲載され、「プランテーション菜園にキャベツ、緑野菜、オクラ、トマト、サツマイモ、玉葱、カボチャ、エンドウ豆等々、多種多様な野菜がニグロ消費用に栽培されている」様子が描かれていた。このように、「共用菜園」はアンティベラム時代を通してますます「奴隷主菜園」的様相を呈していき、奴隷の食生活に変化と潤いを着実に加えていった。それは決して自然の成り行きではなく、既述した経営者であるプランターの積極的運動の所産といえるものであった。それは、1853年のプランター機関紙『南部の土壌』(Soil of the South) がプランターに向けて発信した次の言葉に端的に表われている。「プランテーション菜園をプランテーションで最も重要な場所にしましょう。」「プランテーション経営者が最適な場所にニグロのための菜園をつくることを願っています。」³³⁾

これに対して、プランテーション耕地周縁部に設置された「共用菜園」では、畑作物が主に

フィールド・クロップス

栽培された。サツマイモ、ジャガイモ、玉葱、トウモロコシ、小麦、オート麦、ライ麦、ソラ豆、エンドウ豆、スイカなどである。これは、農園中央部の「共用菜園」では緑野菜を、耕地内「共用菜園」では根菜類、穀類、豆類を栽培するという、一種機能分化をプランターが計画、実行していたことを示している³⁴⁾。

以上のように、「共用菜園」は農園中央部においては、その面積、「プランテーション菜園」ないしは「中央菜園」なる別称、また多種多様な野菜栽培という点から、かつての「奴隷主菜園」的役割を包摂していったことが理解される。更にそれにとどまらず、プランテーションの中には機能分化という形をとりながら、「共用菜園」が商品作物耕地周縁部にまで進出していったところもあった。

次に「共用野菜畑」を見てみよう。この形態は、奴隷を多数所有するプランターが農園中央部に栽培スペースを確保するのが困難なために、プランテーション耕地中に商品作物畑と一緒に一とはいっても、普通はその周辺部であったが一設置したものであった³⁵⁾。具体的には、多くの場合、「サツマイモ畑」(Potato Patch)、「蕪畑」(Turnip Patch)、「エンドウ豆畑」(Pea Patch)、「スイカ畑」(Watermelon Patch) など、種類別の野菜畑であった³⁶⁾。

ここで「トウモロコシ畑」に関して若干論及しておきたい。当時、トウモロコシは主穀として白人黒人を問わず南部人には不可欠な生活食糧であった。それは、自家消費作物としてプランテーション耕地に広がる「トウモロコシ畑」においてかなりの規模で栽培された。この畑が綿花等の商品作物畑同様、奴隷主の管理・運営下にあった点は言うまでもない。ところで、同じプランテーション耕地には奴隷主が奴隷の労働意欲を高める目的で一時には奴隷側の強い要望・要求に押されて一換金性の高い「トウモロコシ畑」を集団/共同「耕作地」として耕作奴隷たちに与えるケースも見られた。一般に奴隷主は、これらの土地に「ニグロ畑」(Negro Patch)、「黒ん坊畑」(Nigger field)、「ニグロ集団耕地」(negroes' field) 等の名を付した。この名称は、明らかに奴隷主が奴隷たちに土地の使用及びそこから生じる収益を享受し得る用益権を容認したことを表わしている。従って、「共用野菜畑」の歴史的役割を析出する際には、用益権を有する集団/共同「耕作地」の可能性も視野に入れながら、慎重に検討していく必要がある³⁷⁾。

さて、広さに関しては、個別野菜畑一枚分の面積はプランテーション商品作物畑と同様、約40エーカー—奴隷監督やドライヴァーが一人で監督し得る最大可視範囲—が標準的であった。しかし、実際にはその半分の20エーカー、更に半分の10エーカーなど、その時々諸条件に合わせて柔軟に対応した。「共用野菜畑」を導入したプランターの場合、大抵耕地中に複数の「共用野菜畑」を設けたため、それらの総面積を算出することは困難である。中にはプランテーション耕地を巡回しながら方々に適地を見つけては、そこを野菜栽培地に指定するプランターもいたほどである³⁸⁾。

「共用野菜畑」の栽培作物については、畑名が野菜そのものを表わしており、それらの名称はプランター記録や元奴隷証言の中に見出される。例えば、アラバマ州の綿花プランター、ウィリアム・ゴウルド(William P. Gould)の日記には「サツマイモ畑」、「蕪畑」、「エンドウ豆畑」、「スイカ畑」、「キャベツ畑」の記載がある。また、ノース・カロライナ州のトウモロコシ・プランター、ジョサイア・コリンズ3世(Josiah Collins III)やステイーブン・ノーフリート(Stephen A. Norfleet)の奴隷労働日誌には共に「サツマイモ畑」が記され、これに加えて前者には「蕪畑」が、後者には「エンドウ豆畑」、「落花生畑」の名称が出てくる。一方、奴隷証言としては、例えば

ジョージア州のジェファソン・ヘンリー (Jefferson F. Henry) の農場には「あらゆる種類の野菜を栽培する」広い菜園のほかに、「ソラマメ、エンドウ豆、サツマイモなどの畑が〔プランテーション〕耕地のあちこちに分散して」いた。また、サウス・カロライナ生まれの奴隷キャスパー・ランブル (Casper Rumble) の農園には女主人の3エーカーの菜園があり、「奴隷たちはいつもそこからたくさん採って食べていた。・・・[農場の耕地には] 落花生畑、ハゼトウモロコシ畑、^{ソルガム}畑、あと幾つかの豆畑があったが、ほかにキャベツ畑、スイカ畑などもあった。」³⁹⁾ これらの例から、「共用野菜畑」では根菜類や豆類を中心に作付けし、それ以外の緑野菜は「奴隷主菜園」ないし農園中央部の「共用菜園」で栽培するという一つの構図が浮かび上がってくる。

4. 「共用菜園・野菜畑」の管理運営及び奴隷による活用実態

では、この「共用菜園・野菜畑」をプランターたちはいかに運営し、また奴隷たちはそれをどのように活用したのだろうか。以下、この問題について考察してみたい。

最初に「共用菜園」について検討しよう。「共用菜園」の労働管理に関しては、「奴隷主菜園」のそれと基本的には同じであった。つまり、菜園専従奴隷が管理責任者となり、比較的小人数の奴隷に指示を与えながら作業に従事させる方法である。このやり方は、例えば野菜の手入れの際、奴隷が自分の嫌いな野菜を勝手に「引き抜いたり、切り倒したり」しない限りは、あるいはまた奴隷主が指示する収穫期日を守らずにサツマイモなど根菜類の早取りをしない限りは、肉体的懲罰を伴うような厳格な労働管理体制にはならなかった⁴⁰⁾。菜園野菜は市場向けではなく自家消費用であり、「見た目の美しさにこだわる必要はなかった。」⁴¹⁾ しかも、手入れ作業に要する労働投下量も商品作物に比してかなり低かった。こうした理由から、プランターはちょっとした刺激や特権を与えて労働意欲を引き出し、可能な限り彼らの自主的労働を背後から見守る間接的労働管理体制を採った。

奴隷の平均的日常生活を『南部の耕作者』に紹介したアラバマ州のあるプランターは、「共用菜園」で働く全ての奴隷が年齢を問わず「鶏を飼う特権」を与えられ、「好きなようにその鶏や卵を売ったり食べたりしている」様子を報告している。一見、使役労働としては手ぬるいやり方のように感じられるが、実はこれにはプランターたちの「共用菜園」に託した近未来的構想あつてのことだった。つまり彼らは、利潤と直結しない自家消費用野菜栽培に関しては、奴隷による自主管理、すなわち集団/共同「耕作地」化を視野に入れていた。実際その一例として、1852年にルイジアナに生まれた奴隷オクタヴィア・ジョージ (Octavia George) は、主人が奴隷たちに毎年2、3エーカーの土地を与えていたが、それに加えて「わたしたちは菜園を一つ持つことを許されました。そしてこの菜園から野菜を収穫して食べていました」と述べている。こうした自己管理体制の方向性を見定めながら、プランターは、早採り禁止、収穫期日厳守という基本的ルールのみを指示、遵守させ、究極的には自らの関与を奴隷に「最良の質の種を供給すること」だけにとどめたいと考えた⁴²⁾。

これに対して、プランテーション耕地の端、すなわち耕地周縁部に設置された「共用菜園」の場合には、根菜類や穀類など畑物を主に栽培するという機能的特徴を備えていたため、必要に応じて畑奴隷全員が耕作に従事した。ジョージアのある奴隷の記憶によれば、「主人はわれわれプランテーション全員のための大きな菜園をひとつ (“one big garden”) 持っていたが、主人がそう [作

業をさせようと] 思った時にはいつでも彼のニガーは全員で耕作しなければならな」かった⁴³⁾。緑野菜を始めとする多種多様な野菜を少数ながらこまめに世話しなければならなかった農園中央部の「共用菜園」に比べ、より広範囲の畑に根菜類等の畑作物を大量に栽培する耕地内「共用菜園」では、頻繁な手入れを要しない分、作業が必要な折には一例えば、集約労働を要する収穫時などには一全員を任に当たさせたのであった。

ここでもまた注意すべきは、奴隷主のごく基本的かつ表には出ない管理・統制が行われていた点である。上述のように、未だ生育途上の野菜の早期穫り入れ傾向に走りがちな奴隷たちに対して奴隷主は、菜園利用規則を遵守するよう管理奴隷やドライヴァを通して間接的に注意を促していた。それは奴隷たちの何気ない証言中の「旬には」、「夏季には」といった言葉に隠されている⁴⁴⁾。

他方、「共用野菜畑」の場合にはプランテーション耕地内に組み込まれていたこともあり、その労働管理・運営状況を調べるには、特に隣接作物畑との関係においてその労働を捉える必要がある。そこで、現存するプランテーション労働日誌を手がかりに、実態に即した実証分析を試みたい。

一事例として考察するのは、ノース・カロライナ州のトウモロコシ・プランター、ジョサイア・コリンズ3世である。コリンズのプランテーション耕地は約30の畑地に細分化され、それらの中に二つの野菜畑「サツマイモ畑」と「蕪畑」が入っていた。彼の『プランテーション労働日誌—1850年1月—1853年7月』(*Plantation Record from January 1850 to July 1853*)をこれら野菜畑に注目しながら見てゆくと、隣接畑とほぼ同時併行で同一作業が進行していることに気が付く。即ち、1850年8月16日金曜日「7名の鋤手、ソー・ミル・カット畑及び蕪畑で畑作業」、10月21日月曜日「15名の鋤手、ローア・ライス畑及びサツマイモ畑で畑作業」という具合である。これは、単に鋤手が蕪畑、サツマイモ畑をそれぞれ隣接畑も含めて一緒に作業をしたというだけに留まらない。実際に蕪の作付けは蕪畑のほかにもソー・ミル・カット畑でも行われ、サツマイモの作付け、収穫作業はサツマイモ畑のほかローア・ライス畑でも行われた。例えば、サツマイモの収穫に関して日誌には、「同畑地 [サツマイモ畑編] で [鋤手15名を除く] 残りの畑奴隷たちで蔓の引き抜き、芋掘り作業に従事」とある⁴⁵⁾。

サツマイモや蕪と異なり、独立した畑を構成しなかった野菜に豆類がある。豆類はよく土壌再生肥料として豆専用畑に栽培せずには他の作物畑中に一緒に植えられたが、コリンズの場合も同様であった。その様子を日誌から引用すると、1850年6月10日月曜日「畑B、畑Cで、[12名の鋤手を除く] 残りの畑奴隷によるトウモロコシの鋤入れ作業及びエンドウ豆の作付け作業」、1852年4月2日金曜日「耕作奴隷、畑F、畑Gでトウモロコシの作付け」、4月22日木曜日「インディアン・タウン畑でトウモロコシの作付け、まぐわによる土かけ」、6月5日土曜日「畑Fおよびインディアン・タウン畑でエンドウ豆の作付け作業」である。要するに、1850年の畑B、畑C、1852年の畑F、インディアン・タウン畑ではエンドウ豆がトウモロコシと一緒に栽培されたのである。日誌には1850年、1852年両年とも4月から6月にかけてこれらいずれの畑でもトウモロコシの「作付け」、「土寄せ」、「除草」、「間引き」、「鋤入れ」作業が手順よく行われていった様子が記されている⁴⁶⁾。

こうした労働状況から、「サツマイモ畑」、「蕪畑」のように独立した畑であろうと、エンドウ豆のように他の畑中に栽培されていようと、プランテーション商品作物耕地労働に組み込まれる形で効率的に行われたことが分かる。ただし、コリンズが野菜畑労働を商品作物労働よりも軽い扱いを

した点は付言しておかなければならない。例えば、「サツマイモ畑」や「蕪畑」の労働従事者数を算出してみると、1回当たり平均労働従事者数は、4~10名と小人数である。また、コリンズの日誌記載頻度を調べると、商品作物であるトウモロコシ作業に関わる記載が頻繁であるのに対し、野菜畑に関する記載は、1/8から1/6と断然少ない。野菜労働に対してはかなり緩やかな管理運営体制が適用されたのであった。そして、このコリンズの「共用野菜畑」運営法は決して彼独自のものではなかった。「共用野菜畑」を導入した他のプランターたちの奴隷労働日誌からも同様の管理・運営法が読み取れるのである⁴⁷⁾。

経営者であるプランターの立場からしてみれば、野菜は奴隷自身の消費作物であるがゆえに自主的労働管理体制を最も望んでいたに相違ない。だが、奴隷一任方式が共同性に起因する責任放棄や利己主義なる問題を生起させ、うまく機能しないことをプランターたちは経験から知悉していた⁴⁸⁾。この意味で、サウスカロライナ生まれのプランター、H・N・マクテイラー (H. N. McTyeire) の次の言葉はまさに正鵠を射た指摘といえる。

「ニグロのために菜園を設けることは良いことである。しかし、共同栽培ということになると、誰も責任を持たなくなるので作物は育たない。また共同利用ということになると、自分の好きな分だけ作物を採っていく者が現われるため、公平に利用されない。そのため、適度に広い土地でニグロ全体の利益になることを視野に入れ、主人の管理下で耕作されることが必要である。」⁴⁹⁾

商品作物ほどには集約労働を要しない野菜栽培にあつては、厳格な組織的監督体制は効率性の点でかなりの無駄が予想された。そこで結局プランターたちは、プランテーション商品作物耕地労働に組み入れ、隣接の、そしてしばしばその周辺の商品作物畑労働と一緒に効率的に、比較的緩やかな監視下で耕作するシステムを確立していった。

では、「共用菜園・野菜畑」の利用者である奴隷側の反応、行動を見てみよう。これまでしばしば引用してきた元奴隷たちへのインタビュー記録は、経営政策の一環としてプランテーション内に適切に配置された「共用菜園」、「共用野菜畑」の活用が日常的営為の一コマとして奴隷たちの食生活にごく自然に浸透していたことを示している。彼らはトウモロコシ、ベーコンの二大食要素の補完として野菜を「いつでも畑から手に入れることが出来た」が、その様子をヴァージニア州の元奴隷ベイリ・カニングハム (Baily Cunningham) は、奴隷小屋で調理する際には「キャベツ、サツマイモ、トウモロコシを始め、どんな野菜も菜園や畑に行つて採つて来ることが出来ました」と、明快に語っている。また、彼らはプランテーション耕地の広大な野菜畑のお陰で、「旬にはジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、スイカなどを含め、あらゆる野菜を [採つて来て] 食べられる」ようになったし、「夏季には仲間と一緒によく広い畑地の中の菜園 (the big field garden) に行つてソラマメ、エンドウ豆、その他様々な野菜を採つてきた」りもした⁵⁰⁾。「共用菜園・野菜畑」が当時奴隷の食生活の中で不可欠な位置を占めていたことが分かる。

次に、「共用菜園」と「共用野菜畑」の二種類を実際に活用していた事例を見てみたい。テキサス州の奴隷カルヴィン・モイ (Calvin Moye) は所有奴隷約70名のプランターの下で生活していた。彼は、季節の変化に応じて利用可能な二種類の野菜栽培地という、テキサスではごく普通に見られ

る野菜栽培地の実態について、次のように報告している。

「我々には豆類、キャベツ、サツマイモ、ジャガイモ、玉葱などをつくる10エーカー程の広い菜園 (big garden) があり、全ての家族は毎日そこから野菜を採ることが許されていた。しかし、我々にはもう一つ広い畑地 (big field) があり、そこでサツマイモ、ジャガイモ、玉葱、豆類などを栽培していた。収穫の日が来るまで誰もそこから野菜を採ることは出来なかったが、収穫日が来ると全員集まって作業に当り、冬の保存食として保管することになっていた。」⁵¹⁾

このようにモイは、プランテーション耕地に設置された日常消費用野菜のための「共用菜園」と保存食用根菜類の「共用野菜畑」の二種類の野菜栽培地を利用することができた。前者の菜園は、奴隷がいつでも利用可能な菜園であり、後者の野菜畑は、不足しがちな冬季用野菜栽培を目的とする畑で、これにより奴隷は収穫した根菜類を保存食に充当することが可能となった⁵²⁾。これは、奴隷たちがいつでも日常的に野菜を入手して消費できたこと、また保存食用根菜類も利用上のルールに従えば、問題なく収穫できたことを示している。奴隷たちは主人の権限や影響力を背後に感じつつも、菜園・野菜畑の実質的利用という点でかなりの自律性を共有していたことが理解されよう。

以上の分析から、われわれは「共用菜園・野菜畑」が含み持つ集団/共同「耕作地」的傾向を読み取ることが出来る。「共用菜園」、「共用野菜畑」の実質的利用者はほとんどが奴隷であり、プランターも奴隷のほぼ自由な利用を許可していた。そこでの労働も半自律的、自己管理的協働的性格といえるものであった。だが、こうした特徴にもかかわらず、現実としてプランターは「耕作地」扱いをせず、自らの管理統制下で運営していった。奴隷側も菜園・野菜畑を自由に利用しながらも、それが奴隷主の所有であることをわきまえていた。正にこの点について、ジョージアの元奴隷イライシャ・ゲーリ (Elisha Garey) は、「それら [菜園・野菜畑] はみんな主人の所有でしたが、わたしたちがそこから採りたいと思う物は何でもくれました」と語っている⁵³⁾。この「所有」なる言葉をゲーリは単に法的所有権を意味して口にした訳ではない。実際に何をどのように植え、いつ収穫するかといった決定を下せるのは自分たち奴隷にではなく主人側にあった、という理解に基づいた言であった。更に、テキサスのジョン・モズレイ (John Mosley) の次の証言は、一見自由な菜園利用にも奴隷主の思惑が働いていたことに気付かされる。「奴隷たちには自分の菜園はありませんでしたが、主人が大きな菜園を持っていて、我々に採らせたい物をくれたのです。」⁵⁴⁾ 奴隷主は奴隷に食べさせた方がよいと判断した野菜を主に植えたのである⁵⁵⁾。畢竟、集団/共同「耕作地」であるか否かの重要な手掛かりはその名称にあったといえる。集団/共同「耕作地」の場合、用益権付与という奴隷主の明確な認識がそこに集約されていたからである。

最後に、集団/共同「耕作地」研究の観点から、「共用野菜畑」の集団/共同「耕作地」への変容・転化の可能性について探りたい。先に検討したコリンズ3世同様、「サツマイモ畑」、「蕪畑」、「オート麦畑」等の「共用野菜畑」を配しながら、それらをあくまでも集団/共同「耕作地」として位置付けなかったプランターたちがいた。ミシシッピ州ランキン郡に奴隷48名を所有していた綿花プランター、ジョゼフ・ジェインズ (Joseph M. Jaynes) もその一人である。彼は『プランテーション日誌』 (*Plantation Journals, 1854-1860*) に日々の奴隷労働内容を記録した。その中に秋季綿花摘取り作業に従事した奴隷個々人の収穫量を曜日毎に書き込んだ一覧表が毎年出てくる。ところが、

第3図 ジョゼフ・ジェインズ『プランテーション日誌』
に見られる野菜の協働収穫作業

出典：Joseph Jaynes Plantation Journals, Rankin County, Mississippi, 1854-1860 in Series F., Part 1, *Records of Ante-Bellum Southern Plantations from the Revolution through the Civil War* (Microfilm), edited by Kenneth M. Stampp.

これら表中の特定曜日欄には奴隷個々人の欄を無視して大きく横書きに、ただ「芋掘り」(Dig[g]ing Potatoes)、「トウモロコシ収穫作業」(G[e]athering up corn)、「エンドウ豆収穫作業」(G[e]athering Peas/Picking Peas)とだけ記されている(第3図)⁵⁶⁾。これは明らかに収穫作業が耕作奴隷たちの協働方式によって行われたことを示す。この内、特に芋掘り作業は専用の「サツマイモ畑」で行われていた。日誌には「[3、4名を除く] 残りの者全員で芋掘り作業」、「耕作奴隷全員でサツマイモ畑を耕作」、「8名の鋤手、サツマイモ畑を耕作」等、計20回以上にわたって「サツマイモ畑」労働が記されている⁵⁷⁾。サツマイモの大半が奴隷用であったにもかかわらず、「ニグロ・サツマイモ畑」といった奴隷用益権を認めるジェインズの表現は全く見当たらない。このことから、ジェインズの「サツマイモ畑」は、実質的には集団/共同「耕作地」に非常に近いながらも依然「共用野菜畑」であり続けたことが分かる。

翻って、同じミシシッピ州のジェイムズ・アレン (James Allen) やジョン・ジェンキンズ (John C. Jenkins)、またアラバマ州のウィリアム・ゴールド (William P. Gould) のサツマイモ畑を見ると、「ニグロ・サツマイモ畑」(boys' Potato Patches/Negro's Potato Patch/negroes' Sweet potato[e] patch) の名称を付けたり、「彼ら自身のサツマイモ」(their own potatoes) なる表現をプランター自身が日誌に書き込むなど、それらが集団/共同「耕作地」であることに疑いの余地はない⁵⁸⁾。

プランテーション記録のかなり綿密な実証分析を経てもなお、「共用野菜畑」と集団/共同「耕作地」との形態、管理・運営上の大きな質的差異を検証することはできない。それゆえ、プランターが奴隷配給用に運営していたサツマイモ畑が後に集団/共同「耕作地」へと変容・転化する可能性

を秘めていたと考えて不自然な理由はどこにも見当たらない。実際、上述のアレンは37エーカーのトウモロコシ畑の一角、7エーカーにある時点で「ニグロ・サツマイモ畑」の名称を与え、集団/共同「耕作地」に転化した。「共用野菜畑」程多くはなかったが、同種の変容・転化は「共用菜園」においても見られた。前に引用したように、ルイジアナの奴隷オクタヴィア・ジョージの農園では奴隷たちは集団/共同「耕作地」として「菜園を一つ持つことを許されていた。」しかし、更に印象的なのはミシシッピ州の元奴隷ヘンリー・マーレイ (Henry Murray) の言葉である。彼は主人が「共用菜園・野菜畑」を集団/共同「耕作地」に転化したことを単刀直入に述べている。「彼 [主人] は我々に『サツマイモ畑』、『もろこし畑』、『菜園』をくれました。我々は初め主人の畑で働き、もしも時間が少し余ったら、次にこれら自分たちの畑仕事をすることが出来ました。時間がなければ、夜その仕事をします。」⁵⁹⁾

以上から、「共用菜園」、またそれ以上に「共用野菜畑」はやがて集団/共同「耕作地」に転化する可能性を十分に秘めた潜在的ないしは擬似的集団/共同「耕作地」として位置付けられるだろう。確かに、「共用菜園・野菜畑」は集団/共同「耕作地」程には奴隷の労働意欲を引き出すことは出来なかった。だが、奴隷主が創出した半自律的労働環境、並びにほとんど自由ともいえるその生産物利用状況は、奴隷の日々の食生活にある種ささやかな充足感、ひいては労働意欲を醸成していった⁶⁰⁾。その意味で、アンティベラム期に展開した「共用菜園・野菜畑」政策は、集団/共同「耕作地」政策と共に、奴隷主、とりわけ企業家的・資本主義的プランター階級により有機的に統合化された労働政策なのであった。ちなみに、種類毎に独立した野菜畑をプランテーション耕地に組み入れ、耕作する栽培方式は、アンティベラム奴隷制、更には奴隷解放後のプランター対解放民という新たな労使関係の時代を経て、20世紀に入ってもなお存続し続けるのである⁶¹⁾。

おわりに

植民地時代に奴隷の搾取的労働使役と一体となり、「奴隷主菜園」を基軸としながらも極力「耕作地」活動を利用し、奴隷自身による充足化を指向した野菜供給政策は、アンティベラム期に大きく転換した。奴隷の主體的、意欲的労働が利潤極大化を実現するという認識の下、奴隷主、とりわけプランター階級は配給食料の充実化と共に、十分な野菜供給の実践に向けた野菜栽培地の拡充策を展開した。

アンティベラム期に現出したより拡充された対奴隷用野菜栽培地は、大別次のような形態をとった。(1)プランテーション居住地のほぼ中央部に位置し、多種多様な野菜を栽培する旧「奴隷主菜園」の拡張型菜園、(2)より広い面積を確保すべくプランテーション耕地周縁部に設置した、やや畑作物偏重的菜園 (以上、「共用菜園」形態)、(3)比較的大規模な農園のプランテーション耕地中に種類別に分散配置した野菜畑 (以上、「共用野菜畑」形態)。

これら三種の野菜栽培地における奴隷労働は、主要商品作物に対して厳格に適用された労働監視体制に比してかなり緩やかな監督下で行なわれた。「共用菜園」の労働管理は、責任者である菜園専従奴隷が小人数の奴隷に指示を与えて動かせる方式であり、プランターはちょっとした刺激や特権を与えて奴隷の労働意欲を引き出し、自身は彼らの自主的労働を背後から見守る間接的労働統括者となった。同じ「共用菜園」でも、プランテーション耕地周縁部の菜園では根菜類、穀類が多く

植えられたため、頻繁な手入れを要しなかったが、労働が必要な際には全員が従事した。一方、プランテーション耕地内に設置された「共用野菜畑」労働は、それに隣接する商品作物畑と共に効率的に、比較的緩やかな監視下で行なわれた。このように、「共用菜園・野菜畑」における奴隷労働は、総じて半自律的、自己管理的協働的性格にかなり近いものであった。

かかる「共用菜園・野菜畑」の性格は、一見、集団/共同「耕作地」であったかのように思われる。しかしながら、「共用菜園・野菜畑」はその運営、活用の如何によらず、奴隷主から用益権を付与されてはいなかった。とはいえ、実質的に集団/共同「耕作地」に非常に近い運営がなされていた。この意味で、「共用菜園・野菜畑」はやがて集団/共同「耕作地」に変容・転化する可能性を秘めた擬似的集団/共同「耕作地」であったといえるだろう。

[付記] 本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号17520511）による研究成果報告書「第4章 集団/共同『耕作地』の周辺で」を加筆発展させ、独立した論文としたものである。

注

- 1) プランテーション経営の合理化・効率化政策に関する簡にして要を得た説明として、Michael Mullin, ed., *American Negro Slavery: A Documentary History* (New York, 1976), 133. 拙論「集団/共同奴隷耕作地—その実態及び歴史的役割—」『新潟産業大学経済学部紀要』第36号(2009年), 124頁も参照。
- 2) 奴隷の衣食住環境改善運動に関しては、Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York, 1974), 524; John H. Moore, *The Emergence of the Cotton Kingdom in the Old Southwest: Mississippi, 1770-1860* (Baton Rouge, 1988), 98. 奴隷に対する野菜供給の重要性を知るには、*De Bow's Review* 10 (1851), 325, 623, 626; 11 (1851), 370; 12 (1852), 292; 13 (1852), 193; 14 (1853), 177-178; 17 (1854), 423; 18 (1855), 340; 19 (1856), 358; *Southern Cultivator* 8 (1850), 162; 9 (1851), 87; 12 (1854), 205; 13 (1855), 171; 18 (1860), 183; *Soil of the South* 1 (1851), 113; 2 (1852), 203; *Farmers' Register* 1 (1834), 564-565.
- 3) 共用野菜栽培地に論及している有益な研究は、今のところSam B. Hilliard, *Hog, Meat and Hoecake: Food Supply in the Old South, 1840-1860* (Carbondale, 1972) 一点のみである。
- 4) 「耕作地」に関しては、拙論「集団/共同奴隷耕作地」123頁; 「奴隷耕作地再考—合衆国南部奴隷制下における奴隷の食生活理解の一助として—」『食生活研究』第21号(2001), 3-12頁。奴隷の経済的自律性を強調する立場の代表的研究としては、Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth-Century Chesapeake & Lowcountry* (Chapel Hill, 1998); Ira Berlin, *Many Thousands Gone: The First Two Centuries of Slavery in North America* (Cambridge, 1998); Betty Wood, *Women's Work, Men's Work: The Informal Slave Economies of Lowcountry Georgia* (Athens, 1995); Roderick A. McDonald, *The Economy and Material Culture of Slaves: Goods and Chattels on the Sugar Plantations of Jamaica and Louisiana* (Baton Rouge, 1993); Loren Schweninger, *Black Property Owners in the South, 1790-1915* (Urbana, 1990); John T. Schlotterbeck, "The Internal Economy of Slavery in Rural Piedmont Virginia," *Slavery & Abolition* 12 (1991), 170-181; Morgan, "The Ownership of Property by Slaves in the Mid-Nineteenth-Century Low Country," *Journal of Southern History* 49 (1983), 399-420; Morgan, "Work and Culture: The Task System and the Work of Lowcountry Blacks and, 1700 to 1880," *William and Mary Quarterly*, 3rd. ser., 39 (1982), 563-599. これ以外の研究例を知るには、Tsumoto Numaoka, "The Land for Slaves Reconsidered: A Strategy for the Management of Slave Labor in the Antebellum South," *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, 2004* (Kyoto, 2005), 113.
- 5) 栄養学的論点から配給食料を分析している研究は多い。その中で、例えば質量ともに十分であったとする研究には、Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (2 vols.; Boston, 1974), vol. 1, 109-115, vol. 2, 90-99. 田口芳弘・榊原胖夫訳『苦難の時—アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』(創文社, 1981), 84-87, 280-289.量的にはまず問題なかったとしながらも、栄養バランスの点で問題があったとする立場には、Todd L. Savitt, *Medicine and Slavery: The Diseases and Health Care of Blacks in Antebellum Virginia* (Urbana 1978), 86-98; John B. Boles, *Black Southerners, 1619-1869* (Lexington, 1984), 88-95; Genovese, *The Political Economy of Slavery: Studies in the Economy and Society of the Slave South* (New York, 1965), 44-46; *Roll, Jordan, Roll*, 603-604, 638-639; Leslie H. Owens, *This Species of Property: Slave Life and Culture in*

- the Old South* (New York, 1976), 50-69. この他、量的には十分でなかったが、飢えに瀕する程ではなかったとする見解は、Kenneth F. Kiple and Virginia H. King, *Another Dimension to the Black Diaspora: Diet, Disease and Racism* (Cambridge, 1981), 79-95. 以上のほか、重要な研究として、Richard Sutch, et al., *Reckoning with Slavery: A Critical Study in the Quantitative History of American Negro Slavery* (New York, 1976), 231-301. Tyson Gibbs, et al., "Nutrition in a Slave Population: An Anthropological Examination," *Medical Anthropology* 4 (1980), 175-262. サッチはフォーゲルとエンガーマンの主張に反論し、平均的奴隷は飢えてはいなかったが、質や種類の点で不十分であったとする。また、ギブスらは南部大西洋沿岸地域を調査し、配給食料の核であるトウモロコシと豚肉に関しては十分であったし、常食は総体的に過酷な労働に耐えうるだけの栄養学的条件を満たしていたと結論付ける。
- 6) 定義上、穀類、いも、豆類を野菜に含めない場合もあるが、本稿ではこれらを含めて考察したい。何よりも奴隷主が菜園、野菜畑においてこれらをよく栽培したからである。特にトウモロコシは、主穀として当時南部人の不可欠な生活食糧であった。奴隷制下においても、トウモロコシは自家消費用としてかなりの規模で生産された。と同時に、南部、とりわけ高南部諸州はトウモロコシを換金作物として商業生産し、低南部プランテーション地域へ出荷していた。Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860* (2 vols.; Washington, D. C., 1933; reprint ed., Gloucester, 1958), vol. 2, 811-812; R. Douglas Hurt, *Agriculture and Slavery in MISSOURI'S LITTLE DIXIE* (Columbia, 1992), 13-15, 65-7112.
 - 7) 家庭成员同士を除く2名以上の奴隷と一緒に自分たちの作物栽培に従事する形態の「耕作地」は、様々な史料の中で“collective”ないしは“common”の形容を以って表現されている。そこで、こうした「耕作地」を集団/共同「耕作地」と表記することにする。集団/共同「耕作地」研究の歴史的意味については、拙論「集団/共同奴隷耕作地」123-156頁。
 - 8) Klaus Loewald, Starika Beverly, and Paul Taylor eds., "Johann Martin Bolzius Answers a Questionnaire on Carolina and Georgia," *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., 14 (1957), 235-236 (傍点引用者), 259; Janet Schaw, *Journal of a Lady of Quality: Being the Narrative of a Journey from Scotland to the West Indies, North Carolina, and Portugal, 1774-1776*, edited by Evangeline Andrews and Charles Andrews (New Haven, 1939, c.1921), 176-177.
 - 9) 「耕作地」が奴隷の労働意欲を高めた点は、彼らの労働態度や収穫量から容易に分かる。*American Farmer*, Ser. 4, vol. 1 (1846), 295; *New York Herald Tribune*, March 8, 1860; James Allen Plantation Book, 1860-1865 (Typescript), November 9, 1862, Mississippi Department of Archives and History, Jackson (以下、MAH); Theodore Rosengarten, *Tombee: Portrait of A Cotton Planter* (New York, 1986), 543; George P. Rawick, ed., *The American Slave: A Composite Autobiography* (41 vols. and index; Westport, 1972-1981), volume 6, *Alabama Narratives* (以下、vol. 6, *Ala.*), 83; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 347; Ulrich B. Phillips, *Life and Labor in the Old South* (Boston, 1963), 283; Duncan C. Heyward, *Seed from Madagascar* (Columbia, 1937), 184-185; William E. Channing, *Slavery and Emancipation* (New York, 1969, c. 1836). 奴隷による近隣市場での生産物取引活動の様子については、差し当り、*South Carolina Gazette* (Microfilm), September 24, 26, 1772; October, 22, 1763を参照。Cf. Joseph Holt Ingraham, *The South-West. By a Yankee* (2 vols.; Ann Arbor, 1966, c. 1835), vol. 2, 54-55; *Harper's New Monthly Magazine* 27 (1863), 676.
 - 10) Berlin and Morgan, eds., *Cultivation and Culture: Labor and the Shaping of Slave Life in the Americas* (Charlottesville, 1993), 1-45; Schlotterbeck, "Internal Economy," 170-181.注4)も参照。
 - 11) 「耕作地」活動の確立時期に関しては、Schweninger, "The Underside of Slavery: The Internal Economy, Self-Hire, and Quasi-Freedom in Virginia, 1780-1865," *Slavery & Abolition* 12 (1991), 2-3; Shlotterbeck, "Internal Economy," 172; Wood, "'White Society' and the 'Informal' Slave Economies of Lowcountry Georgia, c. 1763-1830," *Slavery & Abolition* 11 (1990), 313-314. モンティチェロでの奴隷生産物売却については、Presidential Papers Microfilm, Thomas Jefferson Papers, series 7, vol. 1, Record of Cases Tried in Virginia Courts, 1768-69, Library of Congress; James Bear, Jr., and Lucia C. Stanton, eds., *Jefferson's Memorandum Books: Accounts, with Legal Records and Miscellany, 1767-1826* (2 vols.; Princeton, 1997); Gerard W. Gawalt, "Jefferson's Slaves: Crop Accounts at Monticello, 1805-08," *Journal of the Afro-American Historical and Genealogical Society* 13 (1994), 19-38.
 - 12) 綿花プランテーション経済の拡大が「耕作地」活動に及ぼした影響を知るには、Daniel H. Usner, Jr., "Frontier Exchange and Cotton Production: The Slave Economy in Mississippi, 1798-1836," *Slavery & Abolition* 20 (1999), 24-37; Steven F. Miller, "Plantation Labor Organization and Slave Life on the Cotton Frontier: The Alabama-Mississippi Black Belt, 1815-1840," in *Cultivation and Culture*, 155-169; Joseph P. Reidy, "Obligation and Right: Patterns of Labor, Subsistence, and Exchange in the Cotton Belt of Georgia, 1790-1860," in *Cultivation and Culture*, 138-154.
 - 13) 労働者に対する非人道的な虐待、懲罰よりも、彼らの主体的・意欲的労働を刺激する方が労働生産性を高めることができるという歴史的現実、早くも西洋古代、中世の時代の奴隷や農奴に対する労働使役法に見出せる。M. I. フィンレイ編、古代奴隷制研究会訳『西洋古代の奴隷制－学説と論争－』（東京大学出版会、1970）、288-289頁；

- マルク・ブロック著、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』（創文社、1959）、107頁；伊藤栄『ヨーロッパの荘園制』（近藤出版社、1972）、52頁。
- アンティベラム奴隷制下にあつては、奴隷主は様々なレベルで奴隷の衣食住改善策や労働刺激・報奨制を実践した。例えば、Fogel & Engerman, *Time on the Cross*, vol. 1, 144-157; Mullin, *American Negro Slavery*, 151, 155-156, 177; P. Brown to Cabannis, October 6, 21, Letters, 1858, Septimus D. Cabaniss Papers, W. S. Hoole Special Collections Library, Univ. of Alabama, Tuscaloosa (以下、HSC); Farm Book, 1856-1858, April 25, 1857, Hugh Davis Papers (以下、HDP), HSC; John Nevitt Diary 1826-1832, Southern Historical Collection, Wilson Library, Univ. of North Carolina at Chapel Hill (以下、SHC); Herbert A. Kellar, ed., *Solon Robinson: Pioneer and Agriculturist* (2 vols.; Indianapolis, 1936), vol. 2, 277; Helen T. Catterall, ed., *Judicial Cases Concerning American Slavery and the Negro* (5 vols.; Washington, D. C., 1926-1937), vol. 2, 232-233; Gray, *History of Agriculture*, vol. 1, 558; Joe G. Taylor, *Negro Slavery in Louisiana* (Baton Rouge, 1963), 200-202; V. Alton Moody, *Slavery on Louisiana Sugar Plantations* (N. Y., 1976, c. 1924), 65; Rebecca J. Griffin, " 'Goin' Back Over There to See That Girl': Competing Social Spaces in the Lives of the Enslaved in Antebellum North Carolina," *Slavery & Abolition* (2004), 102-106; Larry E. Rivers, "Madison County, Florida - 1830 to 1860: A Case Study in Land, Labor, and Prosperity," *Journal of Negro History* 78 (1993), 239; G. Melvin Herndon, "Slavery in Antebellum Virginia: William Galt, Jr., 1839-1851, A Case Study," *Southern Studies* 16 (1977), 315-316, 319-320; *Attakapas Gazette* 7 (1972), 25; *De Bow's Review* 24 (1858), 324.
- 14) *Southern Cultivator* 4 (1846), 114. 以下も参照。 *De Bow's Review* 13 (1852), 194; 17 (1854), 422, 425; *Farmers' Register* 1 (1834), 564-565; 4 (1836), 183; *Southern Cultivator* 4 (1846), 113; 5 (1847), 143; 11 (1853), 226; *Southern Agriculturist* 3 (1830), 238-239; 4 (1831), 351; 7 (1834), 367-370; 9 (1836), 228; *Southern Cabinet* 1 (1840), 279; *Soil of the South* 3 (1853), 458; J. R. Commons, et al., eds., *A Documentary History of American Industrial Society* (10 vols.; Cleveland, 1910-1911), vol. 1, 113, 123.
- 15) *De Bow's Review* 13 (1852), 194.
- 16) ただし、サウス・カロライナ、ジョージア沿岸低地帯の米作地帯では米が主食であった。だが、この場合にも「粗びきトウモロコシ」(grits) が収穫期に合わせて配給された。Boles, *Black Southerners*, 88; *De Bow's Review* 22 (1857), 38-44.
- 17) James O. Breeden, ed., *Advice Among Masters: The Ideal in Slave Management in the Old South* (Westport, 1980), 89-113; Plantation Book, 1857-1858, James H. Hammond Papers, South Caroliniana Library, Univ. of South Carolina, Columbia (以下、SCL); *De Bow's Review* 10 (1851), 325, 623; 11 (1851), 370; 12 (1852), 292; 13 (1852), 193; 14 (1853), 177; 19 (1855), 358, 22 (1857), 39; 24 (1858), 325; *Southern Cultivator* 8 (1850), 162; 9 (1851), 87; 10 (1852), 88; 11 (1853), 227; 12 (1854), 205; 13 (1855), 171; *Soil of the South* 5 (1855), 209.
- 18) Rawick, supplement series 1 (以下、s. s. 1), vol. 1, *Ala.*, 450; Belinda Hurmence, ed., *Before Freedom: 48 Oral Histories of Former North and South Carolina Slaves* (New York, 1990), 134.
- 19) 配給食料を量的ないし質的に良かったと受け止めた奴隷は多い。Rawick, vol. 2, part 1 (以下、pt. 1), *S. C.*, 52, 343; vol. 2, pt. 2, *S. C.*, 56, 275; vol. 3, pt. 3, *S. C.*, 46; vol. 4, pt. 1, *Tex.*, 117; vol. 4, pt. 2, *Tex.*, 183; vol. 16, *Ky.*, 84, 104, 117; s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 631, 668; s. s. 1, vol. 5, *Ohio*, 402; s. s. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 77; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 1297; s. s. 2, vol. 2, pt. 1, *Tex.*, 24, 85, 89, 109; s. s. 2, vol. 3, pt. 2, *Tex.*, 629, 670; s. s. 2, vol. 5, pt. 4, *Tex.*, 1623; s. s. 2, vol. 6, pt. 5, *Tex.*, 1975, 1989; s. s. 2, vol. 10, pt. 9, *Tex.*, 3936, 4308; Hurmence, *Before Freedom*, 5, 9, 16, 20, 25, 37, 43, 47, 71, 77, 81, 106, 114-115, 122, 125, 134, 155, 181, 184, 195, 197, 200; Charles L. Perdue, Jr., et al., eds., *Weevils in the Wheat: Interviews with Virginia Ex-Slaves* (Charlottesville, 1976), 102, 276; Lyle Saxon, et al., *Gumbo Ya-Ya: Folk Tales of Louisiana* (Gretna, 1987, c. 1945), 256. 次のような当時のプランテーション観察記録も参照されたい。R. Q. Mallard, *Plantation Life Before Emancipation*, 31-32, SCL.
- 20) Rawick, s. s. 1, vol. 12, *Okla.*, 122; Martin B. Coyner, "John Hartwell Cocke of Brems: Agriculture and Slavery in the Ante-bellum South" (Ph. D. Dissertation, Univ. of Virginia, 1961), 236-237; Uria Bennett interview, "Scuppernon Farms Project, Washington and Tyrrell Counties," vol. 1, chapter 8, the Resettlement Administration, U. S. Department of Agriculture, comp., in the Farm Security Administration Papers, 2 vols., North Carolina Division of Archives and History, Raleigh (以下、NCAH); Rawick, vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 202, 283; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 18, 36; vol. 18, *Unwritten History*, 293; Perdue, *Weevils*, 306; Elizabeth A. Pringle, *Chronicles of "Chicora Wood"* (Atlanta, 1976, c. 1922), 257; Ball, *Slavery in the U. S.*, 138; Theodore Rosengarten, *Tombee: Portrait of A Cotton Planter* (New York, 1986), 68.
- 21) Bennett, NCAH; Perdue, *Weevils*, 306; Rosengarten, *Tombee*, 68; Rawick, vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182.
- 22) Ball, *Slavery in the U. S.*, 138.
- 23) Frederick L. Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States* (N. Y., 1968, c. 1856), 659.
- 24) Rawick, vol. 6, *Ala.*, 238 (傍点引用者); vol. 3, pt. 3, *S. C.*, 192 (傍点引用者); vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 197; vol. 11, pt. 7, *Ark.*, 51; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 73 (傍点引用者)。以下も参照。Rawick, vol. 13, pt. 4, *Ga.*, 15, 75, 187; vol. 15, *N. C.*, 319,

- 344; vol. 16, *Ohio.*, 45-46; vol. 17, *Fla.*, 348; vol. 18, *Unwritten History*, 247; s. s. 1, vol. 1, *Ala.*, 145, 226, 443, 450; s. s. 1, vol. 3, pt. 1, *Ga.*, 78; s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 644, 668; s. s. 1, vol. 5, *Ohio.*, 296, 360; s. s. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 55-56; s. s. 1, vol. 7, pt. 2, *Miss.*, 359, 537, 577, 417, 670, 689, 763; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938, 1080, 1168, 1216, 1228, 1266; s. s. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1485, 1553; s. s. 1, vol. 10, pt. 5, *Miss.*, 1936, 2095, 2186, 2335; s. s. 1, vol. 12, *Okla.*, 110; s. s. 2, vol. 2, pt. 1, *Tex.*, 94, 124, 212; s. s. 2, vol. 3, pt. 2, *Tex.*, 586-587, 748, 844, 865, 921; s. s. 2, vol. 4, pt. 3, *Tex.*, 1030, 1124, 1418; s. s. 2, vol. 5, pt. 4, *Tex.*, 1443, 1487, 1555, 1608; s. s. 2, vol. 6, pt. 5, *Tex.*, 2144, 2157, 2193, 2274; s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2462, 2500, 2797, 2887; s. s. 2, vol. 8, pt. 7, *Tex.*, 3119; s. s. 2, vol. 9, pt. 8, *Tex.*, 3442, 3512; s. s. 2, vol. 9, pt. 8, *Tex.*, 3673; s. s. 2, vol. 10, pt. 9, *Tex.*, 4132. 他方、「主人の菜園から野菜を採ることは許されなかった」と、明確に否定する証言はほとんど見つからない。Rawick, s. s. 2, vol. 10, pt. 9, *Tex.*, 4227.
- 25) Rawick, s. s. 1, vol. 5, *Ohio.*, 296.
- 26) Plantation Book, 1857-1858, James H. Hammond Papers, SCL; “Edward S. Hammond’s Views on Agriculture 1857-1858” in Spann Hammond’s Diary 1857, James H. Hammond Papers, SCL; Drew G. Faust, “Culture, Conflict, and Community: The Meaning of Power on an Antebellum Plantation,” in *Southern Stories: Slaveholders in Peace and War* (Columbia, 1992), 54-71.
- 27) *Southern Agriculturist* 3 (1830), 417, 419.
- 28) 種々の史料中、全奴隷用野菜耕作地は「菜園」(garden)ないし「畑地」(field)の語を以って言及されている。だが、いずれにせよ奴隷の目には実際、「広大な畑」(a big field)と映ったようである。ジョージアの元奴隷によれば、「主人が我々のために野菜を栽培していた所は一般に菜園(garden)などと呼ばれるかも知れませんが、わたしには広い畑(field)のように見えました。実に広大でした。」Ronald Killion and Charles Walter, eds., *Slavery Time When I Was Chillun Down on Master’s Plantation* (Savannah, 1973), 8; Rawick, vol. 6, *Ala.*, 22. こうした証言が示唆しているように、一般には「奴隷主菜園」の単なる拡張では空間的に対処しにくかった。Killion, *Slavery Time*, 43. 注31) も参照。「共用菜園・野菜畑」に関しては、差し当り以下を参照。*Southern Agriculturist* 3 (1830), 417, 419; *Southern Cultivator* 18 (1860), 183; Hilliard, *Hog Meat*, 173-174; Olmsted, *Seaboard States*, 430, 439; Rawick, vol. 2, pt. 1, *S. C.*, 123; vol. 3, pt. 4, *S. C.*, 82; vol. 10, pt. 6, *Ark.*, 104; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 94, 191; vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 247; vol. 15, pt. 2, *N. C.*, 185-186; s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 668; s. s. 1, vol. 5, *Ohio*, 360; s. s. 1, vol. 7, pt. 2, *Miss.*, 670; s. s. 1, vol. 8, pt. 1, *Ark.*, 47; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938, 1080, 1168, 1216; s. s. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1661; s. s. 1, vol. 10, pt. 5, *Miss.*, 1936, 2095, 2186; s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830; s. s. 2, vol. 10, pt. 9, *Tex.*, 4125; Killion, *Slavery Time*, 68; Charles Ball, *Fifty Years in Chains; or, the Life of An American Slave* (New York, 1859), 107-108.
- 29) Farm Book, 1856-1858, March 21, 1857, HDP, HSC; Olmsted, *Seaboard States*, 430; Ball, *Fifty Years*, 107-108; Rawick, vol. 7, *Okla.*, 189; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 1080; s. s. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1661; s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830. 「中央菜園」の導入例として、アラバマのプランター、チャールズ・クロメリン (Charles Crommelin) は奴隷主家族だけでなく「プランテーション使用の」野菜を栽培する中央菜園をつくった。Ball and Crommelin Papers, Alabama Department of Archives and History, Montgomery (以下, AAH). Miller, “Plantation Labor Organization,” 167.
- 30) Rawick, s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938; vol. 8, pt. 1, *Ark.*, 47; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 191; s. s. 1, vol. 3, pt. 1, *Ga.*, 78; s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 668; Hilliard, *Hog Meat*, 173-174. しかし、ジョージアの米作プランター、ジェイムズ・クーパー (James H. Couper) のように、広大な商品作物耕地深く入った所に「菜園」(Garden)を設置するケースも存在した。これは実質、特定野菜を作付けた「共用野菜畑」であった可能性が大である。“Account of Cotton Picked at Hopeton, 1818-1831,” James H. Couper Plantation Records, SHC.
- 31) Hilliard, *Hog Meat*, 173-174.
- 32) Rawick, s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830; s. s. 1, vol. 5, *Ohio.*, 360; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 94. モイの事例において、10エーカーの菜園が屋敷裏手の「奴隷主菜園」でなかったことは所有奴隷数との関連で明白である。一般に奴隷数250~300名の場合の「奴隷主菜園」は4~5エーカーであった。Bennett, NCAH; Ball, *Slavery in the U. S.*, 137-138.
- 33) *Southern Cultivator* 18 (1860), 183 (傍点引用者); *Soil of the South* 3 (1853), 443.
- 34) 注30) 参照。
- 35) 全ての奴隷と白人家族が同じ菜園から十分な量の野菜を得るには予想以上に広い菜園が必要だったことは、例えば4~5エーカーの主人の菜園を見慣れていた奴隷の言からも容易に推察される。Killion, *Slavery Time*, 43.
- 36) Plantation Record, 1850-1853, Josiah Collins Papers (以下, JCP), NCAH; William P. Gould Diaries, 1828-1861, 4 vols., 1853-1856, 1858-1860, passim, AAH (Typescript); Journal of Araby Plantation, 1843-1850, February 5, 1844; August 22, 1845; April 6, 1849, Special Collections Library, Duke Univ., Durham; Joseph Jaynes Plantation Journals, Rankin Co., Mississippi, 1854, 1855, 1857, 1860, passim, in Series F, Part 1, Records of Ante-Bellum Southern Plantations (Microfilm), edited by Kenneth M. Stampp; Farm Book, 1856-1858, July 13, 14, 1857, February 14, May 26, 1858, HDP, HSC; Plantation Journal, 1856-1860, Norfleet Family Papers (以下, NFP), SHC;

- Rawick, vol. 10, pt. 6, *Ark.*, 104; vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 247; vol. 16, *Md.*, 6; s. s. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 258; s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2737, 2829-2830; Killion, *Slavery Time*, 68.
- 37) 集団/共同「耕作地」の分析に関しては、拙論「アンティベラム南部奴隷制下に見られる集団/共同奴隷耕作地の役割」平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書(2009年3月), 1-79; Numaoka, “Josiah Collins III, A Successful Corn Planter: A Look at His Plantation Management Techniques,” *The Japanese Journal of American Studies* 9 (1998), 97-120; “The Negro Patch Revisited: Another Look at Its Structure and Function in the Antebellum South,” *Bulletin of Niigata Sangyo University* 16 (1996), 45-67.
- 38) Killion, *Slavery Time*, 68; Rawick, vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182. 一例であるが、ジョージアのジェイムズ・クーパーは、サツマイモ、エンドウ豆、カボチャ各専用畑の場所と面積を毎年のように頻繁に変えている。“Account of Cotton,” Couper Plantation Records, SHC.
- 39) Gould Diaries, passim; Plantation Journal, January 2, April 23, May 6, 1856, NFP, SHC; Plantation Record, JCP, NCAH; Rawick, vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182; vol. 10, pt. 6, *Ark.*, 104; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 247; Farm Book, April 25, July 13, 14, 1857; February 14, May 26, 1858, HDP, HSC.
- 40) Rawick, s. s. 2, vol. 3, pt. 2, *Tex.*, 606; vol. 11, *Mo.*, 207; s. s. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1553. Cf. Perdue, *Weevils*, 306.
- 41) *Southern Agriculturist* 3 (1830), 417.
- 42) *Southern Cultivator* 18 (1860), 183 (傍点引用者); Rawick, vol. 7, *Okla.*, 111-112 (傍点引用者); *Soil of the South* 3 (1853), 443 (傍点引用者).
- 43) Rawick, vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 94; s. s. 1, vol. 3, pt. 1, *Ga.*, 78.
- 44) Rawick, s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 668; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938.
- 45) Plantation Record, August 16, October 21, 1850, JCP, NCAH; Plantation Journal, 1856-1860, NFP, SHC.
- 46) Plantation Record, June 5, 10, 1850; April 2, 22, 1852, JCP, NCAH.
- 47) 注36) 参照。
- 48) 拙論「集団/共同奴隷耕作地」133-134頁。
- 49) *De Bow's Review* 29 (1860), 359.
- 50) Rawick, vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 191; Perdue, *Weevils*, 81; Rawick, s. s. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 668; s. s. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938.
- 51) Rawick, s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830. この10エーカーの菜園の立地に関しては、注32) を参照。次の史料も参照。Bennett, NCAH; Ball, *Slavery in the U. S.*, 138. また、テキサスの奴隷主が一般に運営した二種類の菜園に関しては、Abigail Curlee, “The History of A Texas Slave Plantation, 1831-63,” *Southwestern Historical Quarterly* 26 (1922), 90.
- 52) 根菜類の中でも豆類は奴隷の好物であり、緑野菜と違って乾燥保存に適していたので、多くの奴隷主が豆類を秋に大量保存し、翌年春から夏にかけて奴隷たちに十分供給できるよう心がけた。*De Bow's Review* 10 (1851), 325; 12 (1852), 292; 19 (1856), 358; *Southern Cultivator* 4 (1846), 127; 8 (1850), 162; 9 (1851), 87; 10 (1852), 88; 12, 227; *Farmers' Register* 5 (1837), 32-33, 301-302; Ron Tyler and Lawrence R. Murphy, eds., *The Slave Narratives of Texas* (Austin, 1974), 33; Holden Garthur Evans Diary, 1854-1868 (Typescript), 36.
- 53) Killion, *Slavery Time*, 68.
- 54) Rawick, s. s. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2797; s. s. 2, vol. 3, pt. 2, *Tex.*, 586, 844, 921; s. s. 2, vol. 4, pt. 3, *Tex.*, 1030; s. s. 2, vol. 5, pt. 4, *Tex.*, 1443, 1487, 1555, 1608; s. s. 2, vol. 6, pt. 5, *Tex.*, 1935, 2144, 2274; s. s. 2, vol. 9, pt. 8, *Tex.*, 3442, 3512, 3673.
- 55) こうした奴隷主の政策的意図に対して、奴隷の中には嫌いな野菜を秘かに引き抜いたり、切り倒すといった水面下での抵抗を試みる者もいた。注40) 参照。
- 56) Jaynes Plantation Journals, November 20, August 21, 1854; October 18, 1855. 以下も参照。August 22, November 21, 1854; October 5-6, November 7, 12-17, 19-23, 26-30, December 1, 1855.
- 57) Jaynes Plantation Journals, November 21, 1854; June 26, 1857; May 16, 1860. 以下も参照。November 20, 22, 1854; April 25, May 31, July 7, November 13-14, 1855; May 16, June 26, 29, August 4, 11-12, 16, 1857; November 17-18, 20, 1858; May 16, July 17, 1860.
- 58) James Allen Plantation Book, March 25, 29, November 9, 1862, MAH; John C. Jenkins Diaries, 1841-1855, October 22, 1849, John C. Jenkins Family Papers, 1837-1900, Louisiana State Univ. Libraries (Microfische) (以下、LSU); Gould Diaries, May 29, 1858, AAH. 以下も参照。Allen Plantation Book, November 9, 1861; April 1, 1862; February 6, 1863; March 14, 1863, MAH; Jenkins Diaries, October 25, November 12, 15, 1845; October 29, November 3, 1849; November 8, 1851; November 1, 1852; April 22, 1854, LSU.
- 59) Allen Plantation Book, November 9, 1861, March 25, 29, 1862, MAH; Rawick, vol. 7, *Okla.*, 112; s. s. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1615. このほか、Rawick, s. s. 2, vol. 1, *Tex.*, 3; Hurmence, *Before Freedom*, 115; Allen A. Platter, “Educational, Social, and Economic Characteristics of the Plantation Culture of Brazoria County, Texas,” (Ph. D. Dissertation, Univ. of Houston, 1961), 221も参照。

- 60) 奴隷の日々の食生活における充足感と労働意欲との関係については、Moore, *Emergence of Cotton Kingdom*, 98-99; Orville V. Burton, *In My Father's House Are Many Mansions: Family and Community in Edgefield, South Carolina* (Chapel Hill, 1985), 160-161; *American Cotton Planter and Soil of the South* 4 (1860), 463.
- 61) Hilliard, *Hog Meat*, 274.